

弘前大学
広報誌

ひろだい

vol.
20
2013.3



特集 中根理事に聞く

弘前大学の教育推進活動、
その多彩な取組と成果。

“弘大スピリット”が凝縮された熱き施設
弘前大学資料館

生きた英語を習得して世界へ羽ばたこう
イングリッシュラウンジ

[学内トピックス] 話題の広場から
弘前大学ボランティアセンターを開設
第12回弘前大学総合文化祭を開催
弘前商工会議所と連携に関する協定を締結
他

弘前大学の教育推進活動、 その多彩な取り組みと成果。

特集

中根理事に聞く



2004年の国立大学法人化を受け、最高学府としての大学のあり方が問われて久しい今、各大学ではより一層、質の高い教育の提供と広報活動に力を入れるようになり、少子化も相まって大学間の競争も一層激しくなっています。そこで、国立大学法人としての弘前大学が、どのように変わりどこを充実させてきたのか、教育担当理事就任1年を迎えた中根理事にお聞きしました。

大学が変わるためにやるべきこと

現在、日本が抱えている諸問題、加えて東日本大震災という国難にあって、「知の拠点」としての大学が果たすべき役割が大きく求められています。昨年6月には文部科学省から「大学改革実行プラン」が、8月には大学教育の質的転換を求める中央教育審議会から出された答申により、特に教育面において精力的な大学改革が加速度的に進められています。

昨年、教育担当理事に就任した際には、弘前大学出版会で出版事業に携わってきた経験から、広報の大切さを身をもって感じていましたから、早々に教育関係をまとめたホームページを立ち上げ、教員・事務職員・学生がそれぞれの立場で、教育現場の状況を知り得る情報提供の場を作ることから始めました。

佐藤学長が所信表明のトップに掲げて

いたのが「教育の充実」。本来、教育機関としての大学のミッションは、「いかに良い教育を提供できるか」にあります。受験生が入学したくなる魅力を備え、学生には充実した教育を提供し、大学としては一定以上の教育レベルに達した学生を送り出す。こういった教育機関としての責務を果たすべく、大学側は常に改善・向上を目指しながら、教育トレンドのトップグループを走ることが求められています。

就任後に手がけた 3つの取り組み

「北海道の受験生に向けたCM制作」は、実はとてもやりたかったことのひとつです。それまでは新聞広告だけでしたが、同じ予算をかけるのであれば、TVCMという形で視覚・聴覚に繰り返し訴えることで、弘前大学を記憶に残せないかと考えまし

た。そこで毎年入学者の多い北海道の受験生へ向けたCMを制作し認知を図っています。

「弘前大学ゆめ応援プロジェクト」は、本学ならではの取り組みとして、今年2013年の受験から募集を開始しました。これは一定の要件を満たせば入学金を全額免除するもので、従来の制度では厳しい条件をクリアしながら半額免除に留まり、しかも募集人数が少ないものでした。入学金が払えないために優秀な学生が大学進学を諦めることがないよう、勉強したいという芽を摘み取ってしまわないよう、即決した案件でもありました。

「TOEICの受験料支援」は、私の就任前から検討されてきました。現在多くの学生から申請が出され成果を上げつつあります。また、今年度から新入生を対象に年2回TOEIC模擬試験を義務付けています。語学はまさにアクティブラーニングです



様々なコンテンツがある「弘前大学教育情報」ホームページ

北海道の受験生へ向けたCMの一場面



から、受け身では身に付きません。こちらが悲鳴を上げるくらい希望者が出てくれればうれしいのですが。いずれも決めたことは即実行しないと意味がないと思っていますから即断即決を目指しています。実は気が短い性格なのでですね。

未来を見据え 今後取り組んでいくこと

今後取り組むべきことで、今見えているものもいくつかあります。

まず「大学院教育の充実」ですが、大学院は専門性が高い教育を提供していますが共通の部分もあります。たとえば国際学会で行う英語のプレゼンテーションや統計学など、文系・理系の研究において共通するスキルがありますから、それをフォローできる科目を洗い出して立ち上げたいと考えています。

「GPA制度の導入」については、すでに土台はできています。GPA制度とは4年間を通して学生の成績を数値化することで、担任・ゼミナール・卒論それぞれの担当教員が協力しながら学生の問題を早い段階で把握し、フォローすることを最大の目的に、各学部で制度の使い方を検討してもらっている段階です。

「ナンバリング制度の導入」については、特に文系など選択科目の多い学部では、自分のやりたい専門にたどりつくためにどの科目を選択すれば良いか、このナンバリング制度を利用すれば、学生自身である程



授業風景

度のカリキュラム編成ができるようになります。また、ナンバリングによって学部間で同じような科目の存在がわかりますから、大学側にとってもメリットがあります。将来的には学部の壁を越えた、有意義な科目立てを可能にしてくれると思います。

また現在、学内で検討しているものに「高大接続」があります。私たちは大学として「こういう学生が欲しい」「こういうふう教育したい」という思いがあり、当然、高校側からの思いもあるわけですが、今までは話し合える場がありませんでした。これは将来の入学制度にもかかわってくるのですが、恒常的に大学と高校とで意見交換をしていくべきだろうと思っています。

弘前大学のミッションを 達成するために

「国際化教育の推進」は大学の方針です。はっきりさせておきたいのは、「国際化教育」＝「英語教育」ではないということ。英語はあくまでも手段でありツールであって、本当の意味での「国際化教育」、すなわち「国際的人材の育成」が目的です。これは「日本人としてのアイデンティティー」、つまりは「弘前大学の学生としての誇り」をどうやって持たせるのかという課題へとつながる、私たちにとって最も大きな命題です。重要なのは1、2年生での教養教育ですが、

これは受け身では身に付かない。そのために学生の自主性を引き出す工夫を、ひとつひとつ模索していくことが大切だと思っています。学生の積極的に能動的な学習意欲はもちろん、教員の教育に対する情熱とモチベーションの向上や維持も重要。何より教職員と学生がコミュニケーションを取り合い、ダイバートしながら進める、「双方向性の教育」に向かっていくことが理想です。

これらの教育推進活動は、教育推進機構会議で話し合いながらも、多くのことを並行して進めて行かなければなりません。すぐに結果が出るようなものではありません。“急がば回れ”の精神で奇をてらわず地道に基礎を固めながら次のステップへ進んでいくことが、やがては本学の教育水準を大きく高めることに繋がっていくと信じ、これから先も努力を重ねていかなければと思っています。

弘前大学理事(教育担当)
弘前大学副学長 中根 明夫(なかね あきお)

1952年札幌生まれ。1974年、北海道大学農学部卒業。1980年、北海道大学医学研究科修了。1980～1981年、ウイスコンシン大学マジンソン校食品研究所研究員。助手・講師を経て1989年に北海道大学助教授。1994年、弘前大学医学部教授。2009～2012年、弘前大学出版会編集長。2012年2月1日、弘前大学理事(教育担当)・副学長に就任し現在に至る。医学博士。専門分野は微生物学・免疫学。茶道歴37年で准教授の資格を有する粋人。

“弘大スピリット”が凝縮された熱き施設

弘前大学資料館

Hirosaki University Museum



名だたる総合大学には博物館がある。大学関係者の長年の夢だった弘前大学資料館の建設が決まったのは2010年、遠藤前学長の強い思いによるものでした。資料館という名前を冠した小さなミュージアムには、大学を離れても常に伝統ある弘大生のアイデンティティーと誇りを忘れない、創設当時そのままの熱き“弘大スピリット”が込められています。

弘前大学の アイデンティティー

「弘前大学資料館」は「弘前大学 過去から未来へ」をテーマに、学生・教職員・OBやOGが本学で培ったアイデンティティーを確認する場として、2012年10月の総合文化祭に合わせて教育学部棟1階に開館しました。560㎡の展示スペースには、作家 太宰治が学んだ官立弘前高等学校などの前身校から現在までの歴史、時代を越えた貴重な資料、未来に繋がる多彩な研究成果など。まさに“弘大スピリット”が凝縮された見応えのある展示がなされ、大学関係者はもとより古い時代を懐かしむ市民の皆さんをも魅了しています。

資料館の建設構想は、長年、県立郷土館の運営協議会委員長を務め、東京国立博物館にもコネクションを持ち、学芸員の資格を有する長谷川教授が適任ということで、2010年に当時の遠藤正彦学長（前学長）から、附属図書館長の長谷川教授に託されたことから始まりました。「遠藤前学長にすれば、本学のような中規模総合

合大学に博物館のないのは非常に寂しいし、欧米の名だたる大学には必ず博物館がある。大学の資格と言っても良いかもしれませんが、大学全体の構想の中で資料館ができれば、総合大学を構成する施設・設備はほぼ整うと考えてのことでした」と長谷川館長は当時を振り返ります。

こうして資料館建設は、全学の総意をどのように形にするのかということからスタート。各学部から推薦された教職員と、特に専門性の高いメンバーによって構成された設置準備委員会を立ち上げ計画が進められました。

貴重な資料に 接することの意義

「弘前大学資料館が目指しているのは“自校教育”」と長谷川館長。「弘前大学とは果たして何なのか、学生や教職員の皆さんに知っていただく。弘前大学に学ぶことの意義を、展示を通して考えて欲しい。自分たちが学び働く大学の歴史や伝統はもちろん、多くの時間やマンパワーが蓄積さ

れた場所であるということ、自覚していただくために資料館があります」と熱く語ります。実際、学生たちは受験勉強に追われ、入学後は勉強に忙しく、弘前大学の歴史や伝統を知るチャンスは極めて少ないものでした。何気なく足を運んだ資料館で目にした貴重な資料に影響を受ける学生が一人でも多くいれば、それは資料館の使命を充分果たしているといえるでしょう。現在、中学生や高校生を対象にしたキャンパスツアーのコースには資料館が組み込まれ、将来の弘大生への期待や可能性も大きく膨らんでいきます。

資料館を開設するにあたっては文化財調査がなされ、その過程で見つかった一級資料など約780点が、現在常設展示されています。当然、展示できなかった資料もたくさんあり、また学部展示は研究成果によって変わっていくものですから、ミニリニューアルも計画されています。「一般の方々には好評なのは、大学の歴史や創立以前の前身校の展示。学生に好評なのは先人の業績でしょうか。各展示ブースには特色があり、それぞれ光を放つものがありますから見応え



太宰治自筆ノート

郷土文学研究者である故 小野正文さんの遺族が附属図書館に寄贈した「太宰治自筆ノート」2冊(レプリカ)は、官立弘前高等学校に入学した太宰が、英語と修身の講義内容を書き留めた大学ノートで、自画像など多くの落書きが見られます。保存のために現在はレプリカを展示しています。



青森医専の校旗

官立弘前高等学校・青森師範学校・青森医学専門学校など、弘前大学創立以前の前身校に関する歴史資料は貴重です。青森空襲の戦禍を逃れて保存されていた青森医専の校旗は、60数年間その存在が知られていなかった本邦初公開の資料。附属病院の倉庫で革のケースの中に大切に保存されていました。鮮やかな朱の縫い取りのある校旗は全国的に珍しいものです。



時を刻む大時計

エントランス右手の大時計は、官立弘前高校時代のSEIKOSHA鐘式の振り掛時計です。1927年から3年間に在籍していた太宰治も、きっと見て聞いていたはず。1930年に修理した記録が時計内部に記されていますが、今でも現役で資料館内の時間を告げています。



芳名録

芳名録の最初のページを飾るのは東京芸術大学 宮田亮平学長ご夫妻の達筆な記名。愛読書という太宰治の自筆ノートに興味を示され、ご自身も芸術家である宮田学長らしく、大学院医学研究科ブースに展示されている人体解剖図を見て、「自分も学生時代に人体解剖を見学し、解剖図を描いたことがある」と懐かしくご覧になっていました。



白神自然環境研究所の展示

白山山地を単なるブナの林という発想で捉えるのではなく、ブナ林の自然環境を支えているのは植物・動物・昆虫・人間という観点から、白神環境全体を把握できる森羅万象をコンセプトにした展示です。引き出しの中の展示品には小学生がとても興味を示してくれます。

は充分です」と長谷川館長。

弘前大学の魅力を資料館から発信

現在、資料館の常設展示は12ブース。それぞれ「前身各校の歩み」「弘前大学の歴史」「郷土資料と津軽学」「環境と未来への研究」「津軽の華 弘前大学とねぶた」「先人の業績」のほかに、人文学部・教育学部・大学院医学研究科・大学院保健学研究科・大学院理工学研究科・農学生命科学部といった、各部局の趣向を凝らした展示ブースが並びます。

また企画展示室を備え、来年度からは年2回ほどの企画展が予定されています。すでにオファーもあり、学内にある放送大学青森学習センターが20周年を迎えるにあたり、弘前大学と共催という形での展示が決まっています。ほかに構想段階のものでは、東日本大震災関連で、災害に関するものや地震のメカニズムといった学内の研究成果の紹介など、学生からの提案も受け入れながら授業やゼミナール、また博物館

関連の実習など、教職員や学生の教育を目標とした学内活用を最優先に、市内外の博物館やほかの大学博物館とのネットワーク構築も視野に入れ、委員会として検討が重ねられています。

「資料館には本学と交流のある東京芸術大学の宮田亮平学長も視察に訪れ、資料館の設立や運営、また大学博物館としての機能において貴重なアドバイスをいただきました」と長谷川館長。「本学の歴史を知ることは、弘前市の歴史・青森県の歴史を知ること。これからも資料館から本学の魅力を内外にアピールしていきます」と抱負を語っていただきました。



弘前大学資料館長・附属図書館長
人文学部教授
長谷川 成一 (はせがわ せいいち)

1949年秋田県生まれ。1973年、東京大学大学院人文科学研究科修士課程国史学専攻を修了。東京大学史料編纂所を経て、弘前大学人文学部へ。1991年、毎日出版文化特別賞受賞。学位論文「近世国家と東北大名」により、東京大学から文学博士の学位授与。2008年から附属図書館長、2012年から弘前大学資料館長を兼務。「日本歴史叢書63 弘前藩」(2004年/吉川弘文館)ほか、著書・共著など多数。日本歴史学会評議員。

弘前大学資料館

開館時間/10時~16時(入館は15時30分まで)
休館日/土曜・日曜・祝日・休日・盆期間
年末年始(12月28日~1月4日)
電話/0172-39-3432
※都合により開館時間の変更、臨時閉館あり。

学生アンバサダーによる報告会を開催

9月28日(金)、出身高校で弘前大学のPRを行った学生アンバサダー(学生大使)が報告会を行いました。

始めに、中根教育担当理事から「入試広報の中で、アンバサダーの役割が重要だと言われています。卒業した先輩が出身高校に行って後輩に対し弘前大学のことを話してもらうということは、進路選択の中で弘前大学を選択してもらうという効果が期待されます。アンバサダーの皆さんの報告を楽しみにしています」と挨拶がありました。

そして、今年度学生アンバサダーとしてPRを行った13名の学生から報告がありました。

報告では、「写真などを多く資料に使用し、

弘前大学及び弘前という街の魅力をアピールしたこと」、「弘前大学・各学部・研究室等の様子を分かりやすいように紹介したこと」、「自身の高校時代のことを話したこと」など、各アンバサダーがそれぞれ趣向を凝らして弘前大学をPRした様子を伺うことが出来ました。

また、このアンバサダーを経験した学生からは、「卒業してから出身校に行く機会がなく、今回のアンバサダーによりお世話になった高校の先生方にお礼が出来た。大学生になってからの何年間で変わった自分を伝えられて良かった。」といった声もあり、学生自身にとっても学生アンバサダーが非常に有意義なものであったことが感じられた報告

会となりました。



報告会の様子

第4回「緊急被ばく医療国際シンポジウム」を開催

大学院保健学研究科では、「これからの緊急被ばく医療人材育成のあり方」をテーマに第4回「緊急被ばく医療国際シンポジウム」を9月30日(日)、本学創立50周年記念会館で開催しました。

同研究科では平成19年度から緊急被ばく医療人材育成の取組みを開始。平成20年度からは緊急被ばく医療のバックアップ体制を編成し、線量計測や特殊臨床検査等の人材育成とシミュレーション等による教育訓練を通して、緊急被ばく医療の基盤となる体制の整備を図るため「緊急被ばく医療人材育成プロジェクト」を展開しています。

プロジェクトの最終年度にあたり、第4回目となる今回のシンポジウムは、本学被ばく

医療総合研究所及び日本放射線看護学会、文部科学省科学技術戦略推進費「被ばく医療プロフェッショナル育成計画」と共催し、独立行政法人放射線医学総合研究所の後援により開催したもので、関係機関から約70名が出席しました。

第1部では同研究科の教員が、それぞれの立場でプロジェクトを振り返り、本学における緊急被ばく医療人材育成活動を紹介しました。海外からは世界保健機関(WHO)やフランス国防軍放射線防護センターから2名が参加し、所属機関の緊急被ばく医療の取り組みについて講演しました。

また、同研究科で実施している「緊急被ばく医療人材育成プロジェクト」の研究成果を

含む17件のポスター発表も行われ、参加者からは活発な質疑応答を行い、緊急被ばく医療への国際的知見を深めました。



関係者による記念撮影

平成24年度弘前大学及び弘前大学大学院 秋季学位記授与式を挙行

平成24年度弘前大学及び弘前大学大学院秋季学位記授与式が9月28日(金)、事務局3階大会議室において行われ、34名に学位記が授与されました。



学位記を授与される修了者

平成24年度弘前大学及び弘前大学大学院 秋季入学式を挙行

平成24年度弘前大学及び弘前大学大学院秋季入学式が10月1日(月)、事務局3階大会議室において執り行われました。



平成24年度秋季入学者

「弘前大学ボランティアセンター」を開設

10月1日(月)、本学は地域貢献、社会貢献の役割を組織的に行うために、「弘前大学ボランティアセンター」を開設しました。本センターは自治体や各種NPO等の市民団体と連携し、ボランティア活動の推進及びその支援を図ることを目指しています。

本学では、東日本大震災直後に人文学部内にボランティアセンターが立ち上がり、包括協定を締結している弘前市等と連携し、「チーム・オール弘前」として岩手県野田村で活動してきた実績があります。本センターは、これをさらに発展させ、全学的な活動とするために組織されたものであります。

当日は、学生会館2階に設けられた「弘前大学ボランティアセンター」前で、佐藤学長と大河原センター長(社会連携担当理事)により「弘前大学ボランティアセンター」の看板が上掲され、その後、大河原センター長から挨拶がありました。

引き続き、これまで人文学部ボランティアセンターが岩手県野田村で活動してきた様子がパネル展示されているボランティアセン

ター内で、関係者による内覧会が行われました。



看板を上掲する佐藤学長(左)と大河原センター長(右)

弘前大学長と新生保護者との懇談会を開催

新生保護者への情報提供、連携体制の充実を図ることを目的として、弘前大学長と新生保護者との懇談会を札幌市で10月6日(土)、八戸市で10月14日(日)にそれぞれに開催しました。

懇談会では佐藤学長から、挨拶に引き続き弘前大学全体の特徴や「イングリッシュラウンジ」、「TOEIC受験料支援」等の就学支援制度、「岩谷元彰育英基金」等の経済支援制度、教員の「オフィスアワー」や「何でも相談窓口」などの相談体制、就職支援センター開設時か

らの本学の就職状況など多岐にわたる説明がありました。

質疑応答では、「初めて一人暮らしをさせたが、不安を感じた際に学生が相談する窓口について、初めはわからなかった」、「就職支援について4年次後期になった際も手厚い支援が欲しい」等の質問、要望がありました。

この懇談会の実施により、新生保護者の方々の本学に対する理解が深められるとともに、学外者の視点で意見・要望等を伺うことができ、今後の本学における就学支援等に係

る管理・運営の一助となりました。



懇談会の様子

福島県浪江町 馬場町長による特別講演会を開催

10月16日(火)、東京電力福島第一原子力発電所事故による放射線問題の解決のため協定を締結している福島県浪江町長 馬場有氏による講演会「震災・原発事故からの再起へ～あの3月15日遠ざかる『浪江町』の標識にはせた思い～」を医学部臨床講義棟小講義室にて開催しました。

講演の中で馬場町長は原発事故を受けて町民への避難指示をした当手を振り返り、「避難の際、浪江町の標識が小さくなっていくのを見て望郷の念に駆られた。3月15日は決して忘れられない日。」と語りました。また、長期化する避難生活で要介護者が増加し、「災害関連死」はこの1年7ヶ月で190名に上ること、町独自の健康管理手帳を作成し全

町民へ配布したこと等を話し、「放射線との闘いは長く続く。厳しい現状を広く認識してもらい、この問題を風化させることはできない。」と聴講に集まった約130名の教職員・学生に訴

えました。

参加した教職員・学生達は被災地の生の声を聞くことが出来る貴重な経験に熱心に聞き入っていました。



講演する馬場町長



講演会の様子

第12回弘前大学総合文化祭「テーマ『Supernova』」を開催

第12回弘前大学総合文化祭が10月26日(金)から28日(日)の3日間にわたり、本学文京町キャンパスで開催されました。

今年のテーマ『Supernova』は、日本語訳では「超新星」と表現されます。総合文化祭において、弘大生並びに来場者の方々の喜びや楽しさなどといったエネルギーを爆発させたい、という思いや、その爆発させたエネルギーを弘前大学だけではなく、弘前市、青森県さらには日本全国にも届けたい、より明るくしていきたい、そして弘大祭が今年の弘大祭だけで終わるのではなく、今年度以降もさらなる発展を遂げ、より新しいものへと進化していったほしい、という願いも込められています。

オープニングフェスティバルでは、集まった大勢の観客を前に総合文化祭実施委員会委員長の佐藤学長が声高らかに開祭を宣言し華々しくスタートしました。

期間中は、学生主体の模擬店でキャンパスは賑わい、学生の日頃の研究成果をもとにした実習や実験を直接体験できる「サイエン

スへの招待」をはじめとし、様々な研究発表がありました。さらに、「爆笑お笑いライブ in HIROSAKI univ.」も開催され、会場は大きな拍手と笑いに包まれました。また、教職員の芸術作品を展示した「職員芸術・造形作品展」や県内各地から計7チームが集合し、華麗な演舞を披露した「よさこい弘大」といったイベントの他に、一般来場者が参加できる「Let's play the BINGO!」や「大抽選会」など多彩な催しも行われました。

昨年同様、包括協定を締結している弘前市により行われた「地元産農産物販売会、りんごジュース無料試飲会」や、青森で採れた海と山の幸の紹介及び販売を行った「鱈ヶ沢物町産展フェア」にも多くの来場者が訪れていました。

本学後援会からの助成によるキャンパス内外を彩る幟、提灯も掲げられ、お祭りムードを盛り上げていました。

学生、教職員、地域住民が一体となり本学の更なる飛躍が感じられる3日間となりました。

【全学イベント】

Opening Festival
職員芸術・造形作品展
大演奏会 in HIRODAI
よさこい弘大
Final Festival
花火

【弘大祭オフィシャルイベント】

弘大カラオケコンテスト2012
看板男子コンテスト～男気爆発!観客を魅了しろ!!～
Let's play the BINGO!
☆BESTパフォーマンス☆
爆笑お笑いライブ in HIROSAKI univ.
看板娘コンテスト～美しく咲き乱れよ～
Rock Festa-2012-
弘大グルメ王選手権2012
大抽選会
着ぐるみで…あなたの心を癒します♪
スタンプラリー2012
弘前大学ソフトボール大会2012
M(模擬店)ー1 グランプリ

【学部祭】

人文祭
教育祭
医学祭
理工学祭
収穫祭



佐藤学長の開祭宣言



来場者で賑わうキャンパス



イベントの様子



弘前大学YOSAKOIサークル「焰舞陣」による華麗な演舞

内閣府「東南アジア青年の船」参加者との意見交換会を開催

10月26日(金)、本学国際交流センター主催による本学学生と東南アジア青年による意見交換会が、本学大学会館において開催されました。この意見交換会は、内閣府の青年国際交流事業「東南アジア青年の船」に参加するASEAN(東南アジア諸国連合)10カ国及び日本の青年29名が、出発前の地方研修のために青森県を訪れた際に、本学が大学国際交流の一環として参加者を招待したことで実現しました。

始めに佐藤学長の開会挨拶後、大西国際交流センター長の弘前大学概要説明を皮切りに、「コミュニティーにおける青年の貢献—変化をもたらすためには何が必要か」というテーマのもと、本学からの参加者36名を

含め、総勢65名が8グループに分かれて、すべて英語によりディスカッション及びプレゼンテーションに臨みました。意見交換会は和気あいあいとした雰囲気で行われ、参加者からは「お互いの共通点が理解できた。」「相手から学ぶべき点が見つかった。」等、話し合いの成果が次々と報告されました。

意見交換会終了後には、グループ毎に当日キャンパス内で行われていた弘前大学総合文化祭に参加し、模擬店などを楽しみ、更に交流を深めました。

外国の同年代の青年との交流を含め、国際交流の機会が少ない本学のような地方大学にとって、このような機会を提供すること

の意味は大きく、今後も様々な国際交流の機会を創出していきたいと考えています。



グループディスカッションの様子

第8回弘前大学学生「言語力」大賞コンテスト表彰式を開催

平成17年7月29日に「文字・活字文化振興法」が公布・施行され、10月27日が「文字・活字文化の日」として制定されたことを記念し、本学附属図書館では、学部学生を対象とした学生『言語力』大賞コンテストを実施しています。

コンテストは、学生がコンテストを通して問題解決にあたり、十分な調査能力、明快な論理能力、説得力をもつ表現能力を養うことを目的としています。

賞は、文学作品部門とテーマ部門の二つを設け、文字数約4,000字の作品を募集し、第8回目の今年は両部門合わせて25編の応募が

ありました。

学内外の有識者による審査員の厳正な審査が行われ、文学作品部門は人文学部2年の齊藤拓さんの「老境の鬼」、テーマ部門(災害復興)は人文学部1年の藤田雄大さんの「語りもたらす復興」が大賞に輝きました。大賞以外に文学作品部門では佳作4作品、テーマ部門では優秀賞1作品と佳作2作品が選ばれ、11月7日(水)に附属図書館において表彰式が行われ、受賞者には、長谷川附属図書館長から賞状と副賞が贈られました。

なお、第1回からの選考結果、受賞作品・講評は、附属図書館ホームページ(<http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/guidetop/gengoryoku/index.html>)で公開しています。

[ul.hirosaki-u.ac.jp/guidetop/gengoryoku/index.html](http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/guidetop/gengoryoku/index.html))で公開しています。



表彰式列席者による記念撮影

平成24年度 弘前大学学術特別賞授与式を開催

本学では、11月16日(金)に平成24年度弘前大学学術特別賞授与式が執り行われました。

学術特別賞には、独創的かつ完成度の高い数編の論文を対象とする「弘前大学学術特別賞(遠藤賞)」と、独創的かつ著者の将来性を伺わせるに足る1編の論文を対象とした「弘前大学若手優秀論文賞」があり、ともに弘前大学における研究水準の向上に著しい貢献をした論文を顕彰し、研究水準の一層の向上を目的として、平成23年度新たに創設されたものです。

授与式では、今年度は遠藤賞2名、若手優秀論文賞1名の受賞があり、遠藤賞受賞者へは副賞として、東京芸術大学の宮田学長が自ら制作されたトロフィーが贈られました。また、両学長及び遠藤前学長からの挨拶後、各受賞者より今後、一層研究を進展させていき

たい旨のスピーチがあり、会場からは大きな拍手が贈られていました。

今回の授与式には、多くの役員等が出席し、大変盛大な授与式となりました。



関係者による記念撮影

国立大学法人弘前大学主催音楽会 弘前大学フィルハーモニー管弦楽団演奏会—八戸公演—を開催

弘前大学フィルハーモニー管弦楽団による演奏会が、11月25日(日)八戸市公会堂において開催されました。

平成15年度から始まった弘前大学主催のこの演奏会は、昨年度に引続き八戸市での開催となりました。

当日は、八戸市民を中心におよそ400名の来場者があり、安達弘潮名誉教授、名誉博士の指揮で、A.ドヴォルザークの交響曲第6番他、計3曲が演奏され、来場者は弘前大学フィルハーモニー管弦楽団の迫力ある演奏に耳を傾けていました。

演奏会終了後、来場者からは「格調高い音色に感動しました。」「素晴らしい演奏ができる大学生になってみたい。」などの感想が寄せられました。



会場の八戸市公会堂で演奏する弘前大学フィルハーモニー管弦楽団

学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム 6大学合同公開シンポジウム 『「学園都市ひろさき」の可能性と大学の役割』を開催

弘前市に所在する6つの大学・短大等で組織する学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアムは、12月1日(土)に本学医学部コミュニケーションセンターで6大学合同公開シンポジウム『「学園都市ひろさき」の可能性と大学の役割』を開催しました。

コンソーシアム会長である佐藤学長の挨拶、来賓である弘前市副市長蛸名正樹氏の挨拶ののち、大阪経済法科大学地域総合研究所所長補佐・経済学部教授 深瀬 澄 氏による基調講演「プロジェクト型インターンシップによる地域活性化とリーダー人材育成～あべの・天王寺まちづくり構想プロジェクト取組事例の紹介～」が行われました。

引き続き行われたパネルディスカッションでは、本学ほかコンソーシアム加盟6大学の教員が集結し、「地域活性化と大学の役割」をテーマに、地域に対する大学の役割や今後の地域貢献のあり方などについて、活発なディスカッションが行われました。

会場には、市民や加盟大学の教職員・学生、また「学都ひろさき」を有する弘前市の行政職員など50名が詰めかけました。参加した市民からは「大学は敷居が高いというイメージを持っていたが、このようなイベントをどんどん開催し、地域に密着した大学をどんどんアピールして欲しい。」との意見も出され、シンポジウムは盛会裡に終了しました。



パネルディスカッションの様子

知財塾を開催

本学では、本学客員教授3名を講師とし、「医学編」「初級編」「Topics編」のテーマ別に、知財塾を12月3日(月)、4日(火)開催しました。

同事業は、教職員、学生および一般市民を対象として、知的財産の基礎知識及び創出・維持・活用等に関する理解を深め、知的財産に対する意識の醸成を目的に、二日間を通して57名の参加を得て行われました。

一日目は、辻田特許事務所の辻田幸史弁理士から「知っておきたい化学・ライフサイエンス特許の基礎知識」と題して、主に化学・ライフサイエンス分野の発明の話題や、特許出願を行う際の留意点などについて講演が行

われました。

二日目は、富沢特許事務所の富沢知成弁理士から「はじめての特許出願～まず何を？次はどうする？～」と題して、特許出願に関する基礎知識についての説明や、特許検索の実演が行われました。

続いて、タニダ国際特許事務所の谷田拓男弁理士から「大学等に身近な知財を中心とした裁判例」と題して、特許権をはじめ、商標権、著作権、契約等に関する裁判例について、実際の判決を示しながら参加者に対してわかりやすい説明が行われました。

講演後は、発明相談や、普段解消する機会がなかった特許出願の細かい疑問点などに

対して、質疑応答が活発になされ、弁理士との交流を深める有意義な機会となりました。



講演する谷田弁理士

弘前商工会議所と連携に関する協定を締結

本学は、弘前商工会議所との間で地場産業の振興や地域活性化など地域社会が抱える課題解決に向けて連携を図り、相互の発展に資するため、12月6日(木)に経済団体では初となる協定を締結しました。

弘前市内で行われた協定書調印式には、弘前商工会議所から永澤会頭、清藤副会頭、菊池副会頭、野澤副会頭、前田副会頭、工藤専務理事及び橋本事務局長が、本学から佐藤学長、神田企画担当理事、江羅総務担当理事、中根教育担当理事、加藤研究担当理事及び大河原社会連携担当理事が出席して行わ

れ、永澤会頭と佐藤学長が協定書を交わしました。

永澤会頭からは、「人口減少による地域経済の縮小にどう対応するかなど経済の視点からの研究をお願いしたい。」と、佐藤学長からは、「本学の地域貢献ばかりではなく学生教育にも力になるものと期待する。」とそれぞれ挨拶がありました。

これまで、大学職員の各種事業への参画や会議所職員が弘前大学で講師を務めるなど協力関係を構築してきた経緯もあり、明文化したことにより、今後は一層の連携を図っ

ていくことが期待されます。



協定書を手にする永澤弘前商工会議所会頭(右)と佐藤学長(左)

弘前大学コンケン事務所を開所

12月14日(金)、タイ王国コンケン大学において、本学としては2番目の海外拠点(タイ王国は初めて)となる弘前大学コンケン事務所の開所式を行いました。

本学からは佐藤学長、神田企画担当理事、大西国際交流センター長、コンケン大学からは、キティチャイ学長、クルチダー人文社会学部部長、ラッチャニー日本語学科教員ら関係者が出席しました。

始めにクルチダー人文社会学部部長から、弘前大学コンケン事務所設立の経緯と概要

について説明がありました。

そして、佐藤学長が事務所開設へのお礼と今後の抱負等を交えたあいさつを行ったのに続き、コンケン大学キティチャイ学長による歓迎のあいさつがあり、コンケン事務所開設を機に日本とタイ王国及び弘前大学とコンケン大学の交流が更に盛んに行われることへの期待が感じられました。

その後、「弘前大学コンケン事務所の設置に関する覚書」を締結、出席者による記念撮影、事務所前でのテープカット等が行われ、

終始和やかな雰囲気の下、開所式は終了しました。



関係者による記念撮影

第12回「弘前商工会議所街づくり大賞」を受賞

本学は、第12回「弘前商工会議所街づくり大賞」を受賞し、1月4日(金)弘前商工会議所新春祝賀会で行われた表彰式において、地域産業振興部門で表彰されました。

弘前商工会議所街づくり大賞は、弘前市で地域振興や元気のある街づくりに寄与した個人や団体を表彰するものです。商工農業をはじめ、各界において地道な活動で地域の振興発展に寄与する等、元気ある街づくりに功績のある方々を表彰し、その不断の努力を称えるために制定され、今年で第12回目になります。

表彰式当日は、弘前商工会議所の永澤会頭から、加藤研究担当理事・副学長に、記念の盾が贈呈されました。

本学では、地方独立行政法人青森県産業技術センター等との連携により、これまで主に廃棄処分されていたサケの鼻軟骨から、高純度のプロテオグリカン(保湿性及び抗炎症作用等の多彩な機能を持つ糖たんぱく質の一種)を低コストで精製する技術が開発さ

れ、研究が継続されてきました。これにより、食品・化粧品・医療関係品等の多様な分野において、未利用水産物を有効活用した製品開発を行うことのできる展望が開かれました。地域に眠る資源を活かした新産業と雇用の創出により、地域経済活性化を可能にするモデルケースとして高く評価されるとともに、今後大きなビジネスチャンスとして成長することが期待できるなど、地場産業の振興に大きく寄与しているとして、「未利用水産資源か

ら抽出したプロテオグリカン(PG)を利用した新産業の創出」で街づくり大賞に輝きました。受賞にあたり、加藤理事から「弘前大学の長年の取り組みを評価していただき誠にありがとうございました。これからも産学官連携により地場産業の振興に貢献できる研究に努めて参りたいと思います。」と感謝の意及び今後の決意が述べられました。



表彰される加藤理事



表彰式の様子

平成24年度弘前大学学生表彰探択一覧

【団体】

社会活動及び課外活動で特に顕著な功績があった学生等

弘前大学スティールパン部	・県内外で精力的に公演を行ったほか、被災地でのボランティア演奏を積極的に行った。また、CD「ラプリー・スティールパン」をリリースした。
弘前大学 津軽三味線サークル	・津軽地方の伝統楽器を演奏する団体として、県内外で精力的に公演を行ったほか、被災地でのボランティア演奏を積極的に行った。また、CD「津軽の三味線と音風景」をリリースした。
弘前大学 グラスハーブ・ アンサンブル	・県内外で精力的に公演を行ったほか、被災地でのボランティア演奏を積極的に行った。
teens&law	・青森県BBC連盟において保護観察中の少年の更生支援活動、試験観察中の少年の更生及び学習支援活動を行った。 ・青森県立児童自立センターみらいにおける学習支援活動を平行して継続的に行い、もって青森県の青少年の健全な更生に寄与した。
H・O・T Managers	・情報誌やガイドブックの発行、イベントの実施、シンポジウムでの発表を通じて、弘前や青森県の公共交通をめぐるまちづくりに貢献した。
弘前大学ソフトテニス部	・弘前ソフトテニス協会80周年記念祝賀会において、これまでの長年の働きに対し同協会から感謝状が贈呈された。

課外活動で特に顕著な功績があった学生等

弓道部	・第16回東北学生弓道新人戦 団体優勝
全学バドミントン部	・平成24年度東北地区大学体育大会バドミントン女子 第3位
医学部ソフトテニス部 (男子)	・第55回東日本医科学生総合体育大会男子団体戦第二位 ・第6回秋季北日本医歯薬学生対校ソフトテニス大会 男子団体戦優勝
医学部ラグビー部	・第55回東日本医科学生総合体育大会優勝 ・平成24年度東北地区大学ラグビーリーグ戦 2部第1位
医学部バドミントン部	・第42回北日本医科系学生バドミントン選手権大会 女子団体戦優勝 ・第42回北日本医科系学生バドミントン選手権大会 男子団体準優勝 ・第55回東日本医科学生総合体育大会バドミントン競技 準優勝 ・第2回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会 女子団体戦優勝

【個人】

研究活動で特に顕著な成果を挙げた学生等

油川 慧子 教育学部4年	・第22回日本クラシック音楽コンクール全国大会 ピアノ部門大学女子の部 第五位
太田 聖也 医学部医学科6年	・第38回日本整形外科学会スポーツ医学学会学術集会において「大学野球投球障害の解明賞」を受賞した。

谷川 聖 医学部医学科6年	・神経変異性疾患におけるCHMP2Bの動態に関する研究に取り組み、CHMP2Bがシヌクレイノパチーに出現する封入体に特異的に発現することを明らかにし、その成果は脳神経科学に関する国際的英文誌の一つである英語原著論文(Neuroscience Letters 2012;527:16-21 Impact Factor2.105)に掲載された。
近都 正幸 医学部医学科6年	・「内分泌細胞微小小胞を伴う胃多発カルチノイド」の研究を第75回日本病理学会東北支部学術集会で口演発表を行った。
布木 誠之 医学部医学科6年	・「肝内胆管癌を併発した原発性硬化性胆管炎」の研究を第29回北日本病理研究会で口演発表を行った。
柘野 佑太 医学部医学科4年	・「ヒト癌細胞増殖における時計遺伝子DECの機能解析」の研究を第9回日本病理学会カンファレンスにて「英語」で口演発表を行った。
北條 初音 農学生命科学部4年	・第122回日本育種学会講演会において研究成果を発表した講演「接ぎ木を利用した内生遺伝子のエピ変異体獲得について」が優秀発表賞を受賞した。
上野 達哉 医学研究科3年	・The Movement Disorder Society's 16th International Congress of Parkinson's Disease and Movement Disordersにおいて、その発表ポスターがブルーリボン賞を受賞した。
井戸向 さつき 理工学研究科 博士前期課程1年	・2012年高分子学会東北支部研究発表会において、「フルオロアルキル基含有ビニルトリメチキシランオリゴマー／炭酸カルシウムナノコンポジットの調製と耐熱性」に関する研究成果を発表し、若手優秀発表賞を受賞した。
奥野 敬太 理工学研究科 博士前期課程1年	・2012年度色材研究発表会において、「種々の芳香族化合物がカプセル化されたフルオロアルキル基含有スチレンダイマー／シリカナノコンポジットの調製と耐熱性」に関する研究成果を発表し、優秀講演賞を受賞した。
相馬 早紀 理工学研究科 博士前期課程1年	・2011年度材料技術研究協会検討会において「800℃焼成後において熱重量減少を示さない芳香族化合物および熱重量減少を示す芳香族化合物がカプセル化されたペルフルオロ-1,3-プロパンジルスルホン酸／シリカナノコンポジット類の調製」に関するポスター発表でゴールドポスター賞を、平成24年度化学系学協会東北大会において、「含フッ素スルホン酸誘導体／シリカナノコンポジットの調製とこれらコンポジットへの低分子芳香族化合物のカプセル化」に関する研究成果を発表し、優秀ポスター賞をそれぞれ受賞した。
一戸 康平 理工学研究科 博士前期課程1年	・国内の学会で5件(登壇3件)、国際会議で3件(登壇1件)の論文発表があり、これらの際立った活動が認められ、情報処理学会東北支部学生奨励賞を受賞した。
牧野 真也 理工学研究科 博士前期課程1年	・鉄基の磁歪合金を用いた振動発電デバイスの設計・試作とその特性評価に取り組み、材料特性と発電能力に関して大きな成果を挙げ、国際会議(弘前市2012年4月)や日本機械学会年次大会(2012年9月)で発表して、おおきな反響(学会、新聞報道、企業等)を得た。
丹野 寿則 理工学研究科 博士前期課程2年	・平成24年度化学系学協会東北大会において「ウイスカー構造の形成に起因したペリレン誘導体／フタロシアニン系光アノードの高出力化」の表題にてポスター発表を行い、優秀ポスター賞を受賞した。
大河原 広樹 理工学研究科 博士前期課程2年	・「アインシュタインの一般相対論を超える理論の地上実験を用いた実証法」を提案して、査読付き論文(共著)が米国物理学会発行の速報誌「Physical Review Letters.」に掲載された。
小橋 力也 理工学研究科 博士前期課程2年	・平成24年度化学系学協会東北大会において「アズレンの特性を利用した熱・電子応答機能分子の合成と性質」の表題にてポスター発表を行い、優秀ポスター賞を受賞した。
齋藤 禎也 理工学研究科 博士前期課程2年	・2011年度材料技術研究協会検討会において「種々の低分子芳香族化合物がカプセル化されたペルフルオロ-1,3-プロパンジルスルホン酸」に関するポスター発表で、口頭講演賞奨励賞を受賞した。また、当該学生の自ら行った研究成果を自身で執筆し、関係学会誌に掲載された。

谷脇 旦 理工学研究科 博士前期課程2年	・弘前大学大学院理工学研究科、八戸工業高等専門学校、岩手大学工学部、一関工業高等専門学校による平成24年度4校学術交流会において、「四鉄に架橋配位した陽イオン性炭素種の化学」について発表を行い、優秀発表賞を受賞した。
佐藤 和敏 理工学研究科 博士前期課程2年	・北極海科学に関する筆頭著者論文が地球物理学分野で権威のあるGeophys.Res.Lett.誌に掲載された。さらに、本論文はNature Geoscience2012年6月号で、リサーチハイライトとして紹介された。
山田 慧生 理工学研究科 博士後期課程1年	・「アインシュタインの一般相対論を超える理論の地上実験を用いた実証法」を提案して、査読付き論文(共著)が米国物理学会発行の速報誌「Physical Review Letters」に掲載された。
山崎 真央 農学生命科学研究科 2年	・日本油化学会フレッシュマンサミットTOKYOにおいて、「クロモジ精油の抗炎症作用」の論文が優秀と認められ、日本油化学会学生奨励賞を受賞した。
安村 良子 農学生命科学研究科 2年	・真菌の生産するphotinide A,Bの構造について、これまでの構造に間違いがあることを見出し、完全な構造を決定し、Tetrahedron誌(IF 3.02)に発表した。

社会活動で特に顕著な成果を挙げた学生等

砂田 大樹 教育学部3年	・平成24年5月2日弘前公園桜まつりで発生した救急事故に際し、適切な応急処置を施し、傷病者の一命を取り留めた功績が、弘前地区消防事務組合より表彰された。
-----------------	--

課外活動で特に顕著な功績があった学生等

今村 洋暁 (柔道部) 教育学部2年	・平成24年度東北学生柔道体重別選手権大会 男子100kg級 優勝
遠沢 和加 (陸上競技部) 教育学研究科2年	・第81回日本学生陸上競技対校選手権大会 女子やり投 第5位 ・第41回東北学生陸上競技選手権大会 女子やり投 第1位
木村 綾花 (陸上競技部) 教育学部2年	・第95回日本陸上競技選手権大会 女子走幅跳 第7位 ・2011日本学生陸上競技個人選手権大会 女子走幅跳 第6位 ・第27回日本ジュニア陸上競技選手権大会 女子走幅跳 第8位 ・第81回日本学生陸上競技対校選手権大会 女子走幅跳 第8位 ・第41回東北学生陸上競技選手権大会 女子走幅跳 第1位



山形 真由佳 (陸上競技部) 教育学部1年	・第65回東北学生陸上競技対校選手権大会 女子ハンマー 第1位 ・第41回東北学生陸上競技選手権大会 女子ハンマー投 第1位
有田 真 (陸上競技部) 理工学部3年	・第41回東北学生陸上競技選手権大会 男子1500m 第1位
高林 杏奈 (医・水泳部) 医学部医学科4年	・第55回東日本医科学生総合体育大会 水泳種目女子100mバタフライ 第1位 水泳種目女子200m個人メドレー 第1位
山内 理紗 (医・バドミントン部) 医学部医学科5年	・第55回東日本医科学生総合体育大会 バドミントン競技女子シングルス 準優勝
鎌田 千尋 (医・バドミントン部) 医学部保健学科3年	・第42回北日本医科系学生バドミントン選手権大会 女子ダブルス 優勝 ・第2回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会 女子ダブルス 準優勝
田澤 彩香 (医・バドミントン部) 医学部保健学科3年	・第42回北日本医科系学生バドミントン選手権大会 女子ダブルス 優勝 ・第2回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会 女子シングルス 優勝 女子ダブルス 準優勝
桑田 大輔 (医・卓球部) 医学部医学科2年	・第55回東日本医科学生総合体育大会 卓球競技男子シングルス 優勝 卓球競技男子ダブルス 準優勝
梅津 英典 (医・卓球部) 医学部医学科4年	・第55回東日本医科学生総合体育大会 卓球競技男子ダブルス 準優勝



イングリッシュラウンジ

生きた英語を習得して世界へ羽ばたこう



まずは、ラウンジに足を運んで会話を交わすことから始めよう!

英語は国際人にとって欠かせない言語ツール。日本人にとって苦手意識の高い英語、自由にしかも気軽に日々触れることができれば、学生の総合的な英語力向上とコミュニケーション力を身につけることを目指して、学内に開設された“弘前大学の小さな外国”イングリッシュラウンジ。昨年のオープン以来延べ4600名の利用があるというラウンジのきめ細やかな取り組みをご紹介します。

ます。そういった学生がもっと増えてくれればうれしいのですが」とパーマン先生。「質問を持ってきたり英語の論文指導を受けにきたり、学生はここでの過ごし方を自分で決めていますね」と中村先生。ラウンジの大きな特徴は常設ということ。指導する先生や科目を越えた共同教育のサポート体制で、学生の自立的な学習をフォローしています。

「イングリッシュラウンジ」で学べること

本学ではこれまでも教育と研究の両面から国際交流を重視し、学生を海外の協定校へ留学させるとともに、さまざまな国から留学生を迎え入れてきました。これからさらに国際交流が進み、外国人と英語で対等に話し競争しなければならなくなった時、必要になるのは英語のコミュニケーション能力です。将来社会に出た時にほとんどの学生たちが、程度の差こそあれ実践的な英語力が必要とされる国際時代にあって、英語はなくてはならないツールと言えます。

「英会話を習いたい」「TOEICの指導を受けたい」「異文化に触れてみたい」「授業

し、異文化コミュニケーションを体験する機会を提供してきました。開設から1年近くがたち、英語関連の科目共通のオフィスアワーを目指し、単に英会話が楽しめるだけでなく、キャリアアップのための英語指導など学生の多彩な目的に合わせて、いつでも英語が学べる場所としての機能が拡大しつつあります。

ラウンジには会話やディスカッションを交わしながら、楽しく英語を学べるスペースと、語彙・リスニング・TOEICやTOEFLのような特定のテーマで英語を教えるスペースに分かれ、学生たちの目的によってそれぞれ利用できるようになっていきます。「ほぼ毎日来ている学生の中には、TOEICのスコアが何百点上がったと報告してくれる人もい

「イングリッシュラウンジ」ってどんなところ?

2012年春、総合教育棟2階の国際交流センター向かいにオープンしたイングリッシュラウンジは、学生の英語力や英会話力の向上と、本学における国際交流のさらなる活性化を目的に開設されました。以来、常駐のネイティブスピーカーの教員たちを中心に、工夫を凝らしながら英語を指導



日本人教員は大学のカリキュラムもサポートします。



パソコンを使って自分自身で英語のスキルを高めていくことも可能。



弘前大学 第1回英語スピーチコンテスト

学生の英語コミュニケーション力の発表の場として、イングリッシュラウンジが企画する英語スピーチコンテストが昨年12月21日18時から、学内みちのくホールで開催されました。スピーチに先だって学生は英語による要旨をラウンジに提出しなくてはならず、審査委員による選考を通過した10名の学生が、大学生生活・英語学習・将来の職業の選択・人生のチャレンジ・社会および国際問題など多彩なテーマでのスピーチを披露しました。各スピーチの後は、審査員を務めたネイティブの教員から内容に関する質問があり、学生たちは聞き取りに苦勞しながらも真剣に答えていました。最後に審査委員長のアンソニー・ラウシュ先生の講評と授賞式があり、スピーチコンテストは大成功のうちに幕を閉じました。

でわからないところを見て欲しい」、学生たちは英語に関するさまざまな目的を持ってラウンジを訪れます。ラウンジには洋書や洋画のDVD、語学学習用ソフトが入ったパソコンが用意され、本学の学生であれば自分の空いている時間を利用して勉強を続けていくことができます。

ここで学べるのは、21世紀教育(一般教養)科目の英語コミュニケーション実習に始まり、英会話・ビジネス英語・英語でのプレゼンテーション・TOEICなど。ミニクラスと呼ばれるさまざまなコースのほかにもセミナーがあり、大学院生向けの「アブストラクトや論文の書き方」、また、就職を控えた3、4年生には、TOEICの教材を使ったリスニング・語彙・リーディングの復習といった「ビジネス英語の基礎」、実用英会話やe-mailの書き方など仕事に必要な英語表現を学ぶ「ビジネス英会話実習」など、常に多彩なプログラムが用意されています。

「イングリッシュラウンジ」 という“小さな外国”

現在イングリッシュラウンジは、日本人教員2名とネイティブスピーカーの教員3名によって運営・教育がされています。ここを訪れた学生がイングリッシュラウンジを“小さな外国”と呼ぶように、思い切って扉を開けた瞬間に感じる無国籍の雰囲気は、教員の出身地の多様性と国際的な経験から

醸し出されるものです。それぞれの教員は自身の専門によって、基礎英語・会話・リスニング・TOEIC・TOEFL・医学英語などを担当、中には「発音クリニック」「英語でランチ」「英語なんでも相談」などユニークなものや、金曜日の夜にTV番組や映画を見ながら会話を楽しむ「ムービーナイト」など、特別なカリキュラムも計画されます。もちろん基本文法をしっかり学びたい場合や授業の補習・留学相談などは、日本人教員がしっかりサポート。ホームページから教員を指名して予約を取ることもできます。

「社会人へのあるアンケートで、70%は電話で何らかの英語を使い、90%はメールで使っているという興味深い結果があります。これはどんな仕事に就いても英語を使う機会があるということ。週1回90分の授業を受けるだけではなく、毎日ここで30分でも英語に触れることが大切なのです」とバーマン先生。中村先生も「ラウンジができてから留学に興味を持つなど、学生の意識が変わってきましたし、実際に英語力もついてきていると感じます」と続けます。

弘前大学の学生について「英語力では高い潜在能力を持ちながら、経験が足りないことが問題だった」という両先生。「国際人としてどう生きていくのか、イメージをしっかりと持って世界へ羽ばたいて欲しい」と願っています。



弘前大学国際交流センター副センター長
国際交流センター教授
英語コミュニケーション部門長
中村 裕昭 (なかむら ひろあき)

1954年大阪出身。神戸市外国語大学大学院(外国語学修士)、京都大学大学院博士後期課程単位取得(言語学専攻)、京都大学文学部研修員を経て、1986年1月海上保安大学校外国語講座に助手として採用。2002年海上保安大学校基礎教育講座教授。海上保安庁在職中は英語教育のほか、国際交流企画室においてASEAN諸国からの留学生受け入れなど、多彩な国際交流事業に従事。2012年から現職。



弘前大学国際交流センター准教授
イングリッシュラウンジ長

Shari J. Berman (シャーリ・J・バーマン)

1954年ハワイ島コナ出身。米国オハイオ州立大学卒業(スペイン語・イタリア語・日本語専攻)。バーモント州School for International Training修士課程修了。元Japan Language Forum代表。Columbia Teachers College, Tokyoや東京外国語大学・成蹊大学などで講師を務め、日本での英語教育歴は20年に及ぶ。2012年から現職。「シニアのアクティブ英会話」(マクミラン ランゲージハウス)など著書多数。

大学生が電車やバスを使いやすくする!?
全国的にも珍しい学生サークルが弘前大学にはあります!!

みんなの移動手段を考える学生サークル

H・O・T Managers

今回はH・O・T Managers代表の大野悠貴さん(人文学部4年)にお話を伺いました。

H・O・T Managersとは?

弘前で生活している人、弘前に遊びに来た人…。 “誰でも”利用できる便利で魅力的な移動手段として、電車やバスなどの公共交通を使いやすくしたい!そして、弘前のまちを少しでも便利で、楽しいまちにしたい!そんな想いで活動しているのが、H・O・T Managersです。

大学生は、クルマを持っている人はあまり多くいません。そのため、日常生活の中で電車やバスを利用したいと思う時が度々あります。しかし、いざ使おうと思っても、わからないことが多すぎて使えません。私たち大学生の移動手段の選択肢は、歩くか自転車を使うかに限られてしまい、弘前での「移動」には大変苦労しています。

ところで、移動手段が充実するということは、ただ単純に利用者が減る公共交通を残すことだけでなく、弘前のまちで生活することが便利で、楽しくなることにもつながります。

ならばっ!公共交通を私たちが応援する



製作した情報誌とガイドブックを持つ代表の大野さんと前田さん

ことで、利用しやすい公共交通に変えていこう!便利にしていこう!ということで、設立したのがH・O・T Managersなのです。

公共交通の利用促進など地域のモビリティ(=移動のしやすさ)の確保に向けた取り組みにおいて、大学の先生ではなく、大学生が中心となった取り組みは全国的にも珍しいです。H・O・T Managersは、電車やバスを使いたいと思うからこそ、大学生が主体となって、弘前の公共交通を育てていくのです。

キーワードは「キッカケづくり」

H・O・T Managersでは、情報誌「ほっと」やガイドブックの製作・発行、2011年開催の「第9回全国バスマップサミットin弘前」や2012年開催の「Hiroasaki Bus&Train Festival 2012」といったイベントの企画・運営が、主たる活動と言えます。これらの活動に共通する点は、「キッカケづくり」です。

例えば、情報誌「ほっと」では、単に電車やバスの情報を載せるだけでなく、目的地として沿線地域の情報やお店の情報も掲載することで、公共交通を利用するキッカケづくりの役割を果たしています。

また、過去2回開催したイベントでは、「公共交通に親しみを持ってもらおう」、「鉄道・バス事業者さんと市民の人たちが交流する」、そうしたキッカケづくりの場として開催しています。

新規メンバーも募集中です!!

ホームページアドレス <http://hotmanagers.blog.shinobi.jp/>
メールアドレス hot_managers@yahoo.co.jp



2012年のイベントでは約4,600人が来場

この「キッカケづくり」を通して、電車やバスを利用し、あるいは関心を持ってもらえば、公共交通は変わっていくと考えます。

みんなの力で弘前の公共交通を育てよう!

「みんなの力で弘前の公共交通を育てよう!」は、H・O・T Managersのコンセプトでもあります。大学生だけでなく、地域も巻き込んで公共交通を応援することで、はじめて、誰もが利用できる便利で魅力的な公共交通に変わると考えています。

情報誌やガイドブックでは、鉄道・バス事業者さんだけでなく、行政や地域のお店からの協力も得て、成り立っています。また、イベントにおいては、商店街などから屋台を出してもらったり、会場設営を建設会社さん、運営を市民ボランティアの方に協力してもらったりして、多くの方々のおかげで開催することができています。

H・O・T Managersの活動は、様々な方たちの支えによって成り立っています。電車やバスなどの公共交通を使いやすくし、弘前のまちを少しでも便利で、楽しいまちにすることで、「三方よし(=H・O・T Managersよし、協力者よし、公共交通・地域よし)」が実現できると考えています。

弘前大学メールマガジン 「ひろだいメルマガ」会員募集のお知らせ

弘前大学メールマガジン「ひろだいメルマガ」では、弘前大学への理解を深めてもらうことを目的として、最新の情報をメールで配信しています。

登録は簡単に出来ますので、配信を希望される方は、下記URLより是非ご登録ください。購読は無料です。(登録はパソコンのアドレスでお願いします。)

「弘前大学教員紹介シリーズ」

弘前大学に在籍する先生の、研究内容はもちろん、趣味など、普段の授業では聞かれない情報も紹介します。

「今、この部活動・サークルがおもしろい」

学生記者がイチオシの部活動やサークルの活動内容などを詳しく紹介します。

「講演会・セミナー等のお知らせ」

予定されている講演会やセミナー等のスケジュールを紹介します。

詳細は、下記URLをご確認ください。



ひろだいメルマガ <http://db.jm.hirosaki-u.ac.jp/magazine/>

ひろだい vol.20

2013年3月発行

弘前大学総務部広報・国際課

表紙：弘前大学資料館

「ひろだい」に関するご意見・ご感想をお聞かせください。

「ひろだい」はWebでもご覧いただけます。

下記URLからお進みください。



弘前大学

〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地

Tel.0172-39-3012 Fax.0172-39-3498

E-mail : jm3012@cc.hirosaki-u.ac.jp

<http://www.hirosaki-u.ac.jp>

